

氏名	有馬 寛子
ヨミガナ	アリマ ヒロコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第447号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 生活を見つめる場から創造性へ ー北方性教育運動と生活版画教育を通してー 〈作品〉 ときをむかえ、ときをおくる

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	本郷 寛
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小松 佳代子
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	木津 文哉
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	林 武史
（副査）	東京藝術大学	名誉教授		上野 浩道
（副査）	岩手大学	教授	（教育学部）	藁谷 収

（論文内容の要旨）

東北と呼ばれる場は、高度成長期以降、地方の近代化によって画一化しつつある。一見便利な生活ではあるが、その地に根づき生きるうえでの本当の幸福とは何かということについて、自立した思考を行う機会が少ないのではないかと。地方の都市化は、語り継がれてきた精神性を見えにくくし、芸術作品の制作においても、生活からの遊離が見られる。

本論文は、東北の地域性に即した生活綴方の教育運動である北方性教育運動と、それを基盤として戦後発展した生活版画教育運動を通して、東北という場に根づく精神性を基盤として生まれる表現とは何かを考察したものである。

両運動はそれぞれ綴方教育が国語教育の一部、生活版画が美術教育の一部として位置づけられるが、ともに教科教育の枠組みにとどまらない展開をみせる。二つの運動は、子どもたち自身が生活を見つめ、表現していくという点で、表現教育活動と捉えることができる。これまでの研究では両者の関係が比較検討されることはほとんど行われていない。それに対して本研究は、両者の関係を、これらの運動に携わった実践家の言説や子どもたちの作品などの史料から明らかにする。それは同時に、その地に生きる教師や子どもたちが表現を通して北方的環境を自ら問いなおしていった活動を追うことにもなる。

第1章ではまず、東北という場が日本という国において歴史上どのような立場におかれていたのかを考察した。文化的中心である中央から「みちのく」と名付けられた時から、東北の地は中央に従属する関係にあった。「みちのく」に暮らす人々は中央の圧力により、蝦夷の子孫であるという本来のアイデンティティを奪われ、制度上のみならず精神的にも「日本化」されていく。多くの犠牲を払いながら「日本化」したにもかかわらず、東北は不運を招く土地として忌み嫌われ、中央に服従した蝦夷を意味する「俘囚」という烙印を付与された。また、資源や労働力を中央へ提供し、国内でありながら植民地的な役割も担わされてきた。

第2章では東北の地域性に即した生活綴方の運動である北方性教育運動について考察した。戦前に東北の教師たちが実践した生活綴方の運動は、生活台と呼ばれる自らの生活の足場を見つめることから始まった。綴方教師たちは、北方的自然環境に起因する厳しい生活環境の中で、自己の存在感を保ち、連帯してどのように生きるべきかを模索していた。全国一律の国定教科書は東北の生活に即したものではなく、東北の地域性に即して子どもたちの将来を展望する教育を模索する上で生活綴方は大きな役割を担った。この運動は、東北の子どもたちが貧しい生活台で環境に埋没せず、労働に従事せざるをえない自らの生活を俯瞰してみる

力をもたせた。自然の美しさや人々の心情は生活を見つめることで初めて気付かれるものであり、生活綴方における詩や散文には、生活の描写を表現にまで高めたことで見えてくる造形性と物語性があらわれている。また、地方での綴方教育の特色である方言の許容により、その場のもつ空気感や臨場感、登場人物の感情が現実味をもって表現される。

第3章では戦後全国へ広まり、特に東北部で活発となった生活版画教育運動について考察した。戦後、生活綴方の文集の挿絵であった版画においても生活を見つめる動きが生まれ、木版画を中心とした生活版画運動は全国に広まった。この運動が定着したのは東北の特に農村部であった。労働者でもあった子どもの視点による描写は生活綴方と同様に地域の生活を的確に捉え、民衆が懸命に生きる姿を映し出している。ただし、生活版画を進めた教師たちの多くは国語教師であり、その実践は綴方的生活直視の方法論を版画におきかえたもので、美術教育の視点に立った場合、抽象的な内面の表現、造形性の探究という根本的な部分が不足している。造形性を追求していくなかで精神性が求められ、その先に地域性を見つめるというプロセスがなければ、素朴さのみが評価され、綴方が貧乏綴方と揶揄されたように一地方に留まった表現となってしまう。

第4章ではこうした戦前・戦後の生活を見つめる教育実践についての考察を現代へとつなぐため、イヴァン・イリイチの言う、その土地に独自の「ヴァナキュラー」な価値を取りあげた。東北には、美の本質を探るために必要な、基層に息づく自然への畏れと敬いを備えた縄文的思考がある。その思考は現代においても、「人間生活の自立・自存を志向する」ために、「日本化」と近代化によって中央に従属させられてきた東北の地で自立した創造性を可能にする。

芸術作品が地域から浮遊したものとなっている状況に対して、生活綴方と生活版画における子どもたちの作品から創造活動の原点となる表現の意味を問い直すことは、現代における創造性を捉え直すきっかけとなる。本論文の意義は、この点を明らかにしたことにある。

(博士論文審査結果の要旨)

提出論文は、東北地方で戦前から戦後にかけて展開した生活綴方運動と生活版画運動を表現教育としてつなげ、厳しい生活環境の中で自己を見つめることによって生み出される創造性を教育実践の分析を通して描き出したものである。国語教育と美術教育としてこれまで別々に研究されてきた二つの運動を総合的に捉え、当時の子どもの作文や版画作品、指導した教師の言説を丁寧に追った好論文である。

第1章では、東北独自の創造性を考察するために、日本の正史では周縁に位置づけられてきた東北の文化変容と、その中で培われた自然観・芸術観を跡づける。抑圧されてなお在り続ける文化的基層に目を向け、宮澤賢治や棟方志功の思想を東北出身の筆者ならではの視点から読み解いている。

第2章から第3章にかけて表現教育の実践が論じられる。『赤い鳥』の綴方に影響を受けて成立した北方性教育運動は、東北の厳しい自然環境と「生活台」という独自の概念を基盤として、芸術教育も含めた表現教育として展開する。子どもたちの詩や散文に、現実を見つめる鋭い視線と豊かな造形力を見るとともに、その指導が容易ならざるものであったことを指摘する。また、綴方文集の表紙や挿絵として始まった版画が、戦後東北地方で生活版画として独自の発展を遂げた歴史的経緯を詳細に論じている。魯迅の革命運動との関わり、戦前の自由画や生活画の教育実践からの展開などが丁寧に論じられ、さらに高度経済成長期以降、生活を見つめる教育実践が立ちゆかなくなっていく状況も論じられる。具体的な事実の積み重ねと制作者としての視点から生活版画教育を考察することで、東北地方の表現教育の特質を浮かび上がらせるとともに、筆者自身の美術教育観を明確化している。

第4章では、東北の地における今後の表現活動を展望するために、I. イリイチの言う「ヴァナキュラー」な価値に依拠して地域の生活に根ざした創造性のあり方を理論的に考察している。創造行為は時代や社会状況の影響を受け揺れ動くが、その地が歴史的に培ってきた文化性や自然環境と密接に結びついた精神性を基盤にすることの重要性が論じられる。

本論文は、ある一時期の東北地方で展開された表現教育実践を主題としているが、自らの立っている足場を見つめそこからの価値転換を図ることは創造行為において普遍的な意味を持つものであり、「本来の美術

はその場の歴史性と生活性に根づいたものでなければならない」という筆者自身の美術観を鮮明に打ち出すものになっている。以上のような点から、審査会において課程博士論文として優れたものであると審査員全員一致で評価し合格とした。

（作品審査結果の要旨）

提出作品「ときをむかえ、ときをおくる」は、大理石による彫刻作品であり、実材に正面から向き合い、真摯に取り組んだ作品である。

二個の巨大な大理石を用い、貝殻の持つ美しくセクシーなイメージを本人なりに解釈し咀嚼して形にしたものである。柔らかな貝殻の形を表現しつつ、彫刻の力強さへと変異させていることがまず評価された。

制作途上で一個の石がその本来の目に沿って割れてしまうというアクシデントがあったが、それを逆に取り込んでイメージの拡大につなげ、緊張感のある配置と割れ肌が静謐な空間を作り出しており、そうした造形力は本人の石彫制作の力量とセンスによるものであるとして評価された。また、全体のイメージが甘くなる寸前でその切削を止めており、どこで手を止めるか、という点においても成功しているといえる。表面の研磨の度合いにおいても、申請者が博士課程3年間で積み上げてきた技術に基づき一定の完成度を見せている。大理石本来の石目や模様が作品に変化するレベルまで我慢を重ねて表現を追求しており、その根気と集中力が評価された。

審査の結果、本作品は作品に込められた自身の様々な思いを説明的、感傷的にならず、飾りけのない単純化を追求する姿勢を通して、彫刻表現としての力強さと質を高めており、申請者がこれまでに培った石彫の確かな技術をもとに、素材と形との関係を美しく造形した秀作であると審査委員一同の高い評価を得た。以上のような点から本作品は、博士号の取得に十分値すると判断され合格とした。

（総合審査結果の要旨）

申請者の有馬寛子は、博士課程において彫刻実技研究と東北の美術教育についての理論研究に一貫して取り組んできた。

理論研究の成果として、提出された論文「生活をみつめる場から創造性へー北方性教育運動と生活版画教育運動を通してー」は、申請者が生まれ育った東北地方で戦前から戦後にかけて展開した生活綴方運動と生活版画運動を中心とした教育実践の分析を通して、厳しい生活環境の中で自己を見つめることによって生み出される創造性について考察している。また、高度経済成長期以降、生活を見つめる教育実践が立ちゆかなくなっていく状況から、東北の地における今後の表現活動を展望している。そして、創造行為は時代や社会状況の影響を受け揺れ動くが、その地が歴史的に培ってきた文化性や自然環境と密接に結びついた精神性を基盤にすることの重要性を論じている。

審査の過程において、本論文はある一時期の東北地方で展開された表現教育実践を主題としているが、自らの立っている足場を見つめそこからの価値転換を図ることは創造行為において普遍的な意味を持つものであり、「本来の美術はその場の歴史性と生活性に根づいたものでなければならない」という筆者自身の美術観を鮮明に打ち出すものになっており、これからの東北の美術教育の一つの在り方を示唆する高い水準にある課程博士論文として評価された。

博士審査展提出作品「ときをむかえ、ときをおくる」は、貝殻をモチーフにした大きな白い大理石で作られた石彫二つを構成したものである。東北出身の申請者が修士課程、博士課程において一貫して追究してきた、東北の山並みの稜線のイメージを重ね合わせて造形化している。飾りけのない単純化を追求することで、雄大で静かな空気感を感じさせる力強い作品として完成させている。

審査の過程において、本作品は申請者がこれまでに培った石彫の確かな技術の裏付けをもって、実材に正面から向き合い取り組んだ作品であり、現代人が失っている自然と人と彫刻との関係を静かに感じさせる秀

作であると評価された。また、作品に込められた自身の様々な思いを説明的、感傷的にならずに、表現の領域まで高めたという点でも評価され、博士号の取得に値する作品であるとされた。

課程博士学位申請で取り組んだ研究成果は、申請者自身が地道な研究を通してたどり着いたものであり、本人のこれからの制作や研究を進めるにあたり基盤となるものであると考えられる。こうした真摯な研究姿勢が論文執筆と創作研究共に優れた結果に導くことが出来た要因として評価できるところである。

総合審査結果として、提出された論文と作品の関係も加え、一貫した研究の成果が大いに認められる。論文・作品ともに真摯な態度で取り組んだその内容は、質の高い優れた研究であると高く評価し総合的に合格とした。